

「神輿会」研究の課題

——都市祭礼研究の一視点——

三 隅 貴 史

一 はじめに

東京大都市圏における地域共同体の衰退や住民の高齢化が指摘される中、神輿の渡御は今日においても都市のにぎわいを生み出し続けている。

そのような今日の都市祭礼における神輿渡御を支えている存在として、「神輿会」¹⁾が挙げられるだろう。秋野淳一(二〇一五)は、神田祭において二〇一三年に宮入りを実施した五二の町会のうち最低四一の町会に神輿同好会が参加していること、そして一〇〇名以上の神輿同好会の成員が参加している地域も珍しくないことを地域住民へのインタビュー調査などから示した。東京圏の祭礼に関するそのほかの先行研究も同様に、祭礼において多数の神輿会が神輿渡御に参加していることについて記録してきた²⁾。このような神輿会の神輿渡御への参加は、都市祭礼の構造に大きな影響を与えている可

能性があるといえるだろう。

にもかかわらず、神輿会そのものを研究対象とした上で、神輿会が都市祭礼に与えている影響を説明することに貢献した研究は必ずしも豊富とはいえない。そこで本論文は、ひとつの祭礼以外における包括的な神輿会の姿を中心的な研究対象とすることの重要性と、そのための分析視角を提示することを目的とする。以下では、これまでの神輿会に関する言説や先行研究を振り返りながら、ひとつの祭礼以外の神輿会の姿に注目した研究成果が必ずしも豊富とはいえないことを示す。そして、神輿会の包括的な姿を研究対象とすることの意義として、都市祭礼の変化³⁾をより鮮明に描くことができるという点を論じる。それらの上で明らかにされるべき課題のひとつである、「神輿会の成立と展開」について、これまで用いられてこなかった資料である日本神輿協会アカデミー編(二〇一〇)に掲載された数量的データをを用いて一定の傾向を示すことを試みる。最後に今後の神輿会研究において取り

組まれるべき課題を示し、本論文を終えたい。

二 神輿会に対する言説と先行研究

神輿会に関する言説や先行研究について包括的に取り上げ、検討を行った論文は管見の限りでは見当たらない。本章では神輿会について言及した言説を紹介した上で先行研究の検討を行う。そして、先行研究の成果を最大限に活用しながらも、ひとつの祭礼という枠組みを乗り越え、包括的な神輿会の姿を明らかにするために、本論文が採用する分析視角を示したい。

(一) 神輿会に対する言説

神輿会に対する、神輿会の周辺に存在する人びとや成員自体による語りは、これまで神輿会に言及した研究において積極的に取り入れられてきたとはいえないが、豊富に存在している。先行研究の検討を行なう前に以下では、神輿会に対する典型的な言説を紹介する。

まずは、神輿会の周辺に存在する人びとによる神輿会に対する言説を取り上げる。このような言説は「神輿会を他者化する言説」と、「神輿会に親和的な言説」という二つに分類することができる。

祭りとなればフィーバーしてしまう。そんな神輿野郎と神輿ギャルの集まるのが神輿同好会だ。

どんな祭りにも参加してしまふ。それも、自前の神輿をかついでいく会も出てきたという。もちろんコスチュームはカラフルな祭り半纏。これを着ると心が浮かれてくるそうだ(小澤一九八四二〇四)

小澤宏之はこのように、神輿会が神輿担ぎにおいて熱狂的に、時として暴力的になることについて「フィーバーしてしまふ」と、問題視されることもあるとこの祭礼でも参加していく行為について「参加してしまふ」と、軽く表現している。これらの行為をもとに地域の人びとなどが暴力的であると神輿会を語ってきたことは正反対といえるだろう。

その一方で、神輿会の成員による会についての語りも豊富に存在している。管見の限りで、最も多くの神輿会の成員による言説が掲載されている書籍は、日本神輿協会アカデミー編(二〇一〇)である。本書は、全国の神輿会の中央団体である日本神輿協会が協会の成立三〇周年を記念するために出版した書籍である。日本神輿協会の設立趣意には、「日本の伝統文化としての神輿」という側面を重視していることが明示されている。

「神輿会を他者化する言説」に該当する事例として、警視庁の発表に影響を受けた「神輿会は暴力団である」という言説が挙げられる。このような言説には、二〇〇七年の朝日新聞に、警視庁の調査に基づく「神輿集団、代表の七割は組員 浅草・三社祭、資金源に? 乗り代一〇万円」という見出しの記事が掲載されたことも影響を与えている。この記事や神輿会を他者化する言説において指摘されているとおり、神輿会と暴力団との間に関係が無いということではできない。しかし、警視庁は「代表の約七割が組員である」ということを指摘しているにすぎないのであり、「神輿会の成員の七割が暴力団組織と関係ある」と言及している訳ではない。しかし、「神輿会の成員の七割が暴力団」という言説は、神輿会の様々な行動に対して不満を持つ神職や地域の人びとの語りにおいてしばしば登場するものである。

「神輿会に親和的な言説」に該当する事例として、写真家である小澤宏之によるエッセイが挙げられる。小澤宏之(一九八四)は、写真やエッセイなどによって構成されている書籍だが、その中では活力があり頼もしい存在として神輿会が語られている。本書の最後には「神輿同好会一覽と半纏」という章が設けられており、東京圏の三四三の神輿同好会が紹介されているが、その章の冒頭には次のような文章が書かれている。

本会は、日本伝統文化の保存普及に努めるとともに、会員相互の理解と融和を深め、地域社会、並びに文化の発展に貢献し、神輿の心を通じて青少年の健全な育成に努め豊かな人格形成を図り、ひいては世界平和、国際文化交流、及び親善の重責達成に寄与することを目的とする(日本神輿協会アカデミー編二〇一〇 iii)

本書は、こういった設立趣意に賛同する傘下の一六の連合会・二〇二の神輿会の成員が、自身の会について語ったものであり、神輿会の成員が有する価値観を理解しようとする上で重要な出版物であるといえるだろう。

発信範囲がより大きなメディアにおける神輿会の成員自身による語りも存在している。代表例として、産経新聞において連載された神輿会へのインタビュー記事「やんちゃ美学」シリーズ(二〇〇三年一月九日から一月二十七日まで連載、全四〇回)、そしてそれが発展する形で出版された大江戸睦監修(二〇〇六)が挙げられるだろう。大江戸睦監修(二〇〇六)における神輿会の成員自身による語りでは、自身の会が複数の祭礼に参加していることを誇らしげに語っているほか、ある旅館に出入禁止になったこと(八四)や、北方領土返還運動に参加していること(一七二)などが語られている。

神輿会の周辺に存在する人びとや、神輿会の成員による神輿会に親和的な言説においては、神輿会を持つ、日本の伝統を重んじていること、一部で暴力的な側面を持つこと、どの場所の祭礼にも参加していることといった特徴はむしろ誇らしげに記載されている。こういったことを目の当たりにした人びとが、神輿会を暴力団と関係あるものとして語っていることとは正反対であることが指摘できるだろう。

(二) 神輿会に対する先行研究

では、神輿会を研究してきた先行研究は神輿会をどのように取り上げてきたのだろうか。都市祭礼研究の文脈に研究を位置づけた上で、神輿会について言及した研究は一定の蓄積があり、それぞれが興味深いひとつの祭礼における神輿会の姿を報告している。

松平誠(一九九三)は、藪田稔の調査から約二五年が経過した一九九二年度の神田祭において、神田祭と町会との関係がどのように変化しているかを追跡することを目的としたものである。神輿同好会に関しては、氏子神輿宮入参拜連合渡御に参加した五七の神輿同好会にインタビュー調査を行うことで、それぞれの会の団体名・所在地・成立年度・構成人員・参加人数・上部団体・参加方法などを明らかにしている。

高橋平徳(二〇〇七)は、現在の元三島神社祭礼がどのよ

うに行われ、どのような人びとによって支えられているかを明らかにすることを目的としたものである。この中で高橋平徳は、実質的な祭礼の運営が地域に存在する神輿同好会によって行われていることや、「半纏合わせ」と呼ばれる懇親会が行われていることなどを報告している。

清水純(二〇一二)は、祭礼に観察される人間関係のありようを切り口として、祭礼を継承する人びとの意識や価値観を明らかにすることを目的としたものである。この中で清水純は、神輿同好会と地域との対立模様や、対立を乗り越えるための手段として「半纏合わせ」が用いられていることなどを報告している。

秋野淳一(二〇一五)は、藪田稔・松平誠の神田祭調査からの変化を踏まえ、二〇一三年の神田祭の特徴を明らかにすることを目的としたものである。この中で秋野淳一は前章で述べたとおり、多くの神輿同好会が神田祭に参加していることなどを指摘している。

これらの研究における神輿会に対する記述は、松平誠(一九九三)による神輿会の成員に対するインタビュー調査を除き、地域の組織への聞き取り結果を中心としているという特徴を持つ。そこから分かるとおりこれらの研究では、「維持手法として用いられている神輿会」という視点から神輿会に言及しており、神輿会をひとつの祭礼の中に配置された静

的なものとして言及するに留まっている。筆者はこのことが、ひとつの祭礼以外での神輿会の姿が必ずしも明確になってきたとはいえないことの要因のひとつであると考えている。

図1は、ひとつの祭礼における神輿会の姿について、地域の組織への聞き取りを中心に研究してきた先行研究の視点を図示したものである。筆者はこの視点では、ひとつの祭礼以外での神輿会の姿を記述することは難しいと考える。神輿会

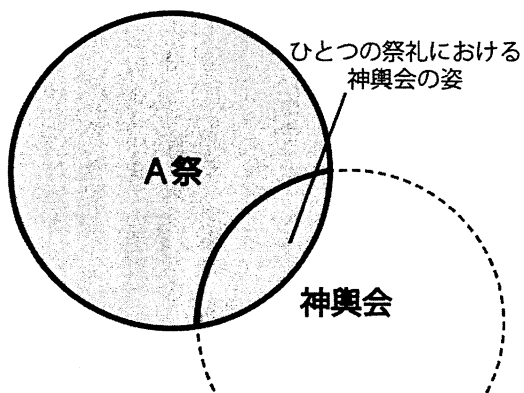


図1 先行研究の視点
灰色部分が研究対象を指す
筆者作成

を主要な研究対象としてこなかったという面では、都市祭礼研究による神輿会研究も、神輿会を他者化してこなかったと断言することはできない。複数の祭礼に参加していく姿や、彼らの練習、イベントでの姿などを含んだ包括的な神輿会の姿を明らかにする必要があるという部分で、更なる研究の余地があるといえる。

その一方で、神輿会に親和的な言説と同様に、神輿会の成員に対して聞き取り調査を行うなどの方法によって神輿会を研究したものもある。これらの研究は、五つの観点到整理することが可能である。

一点目として、神輿会の誕生に関する歴史的な展開について言及した研究が挙げられる。秋野淳一編(二〇一四)は、神輿同好会「飛雄連」の元会長の語りを記述したものである。元会長の語りでは、一九七四年頃の神輿同好会をめぐる社会環境や、神輿を担ぐことに関する意識などが語られている。

二点目として、会に所属する人びとの関係性や、会長のふるまいなど、神輿会に所属する人びとや会員同士の関係について紹介した研究が挙げられる。八木橋伸浩(二〇〇八)は、調査研究の中で倫理観に関する事例を紹介するものであるが、八木橋伸浩の豊富な神輿担ぎ手集団に関する研究結果の一端が見受けられるものである。八木橋伸浩は本論文において、ひとつの神輿担ぎ手集団の所在地・中心人物・構成員・

友好団体を示している。また、中里亮平（二〇〇八）は、く
らやみ祭りにおいて「先生」と呼ばれ、尊敬されている祭同
好会の代表を事例のひとつとして取り上げて、「生まれ育ち」
『顔が利く』までの経緯、『顔が利く』と認識するとき
について、聞き取り結果をまとめている。

三点目として、神輿会に所属する人びとが有する価値観の
理解を試みた研究が挙げられる。清水純（二〇一〇）の元にな
った論文といえる清水純（二〇一〇）は、地域に存在する
神輿会に注目することで、神輿同好会の成立契機や彼らの持
つアイデンティティ、神輿同好会のあるべき姿などに言及し
ている。また佐々木真里（二〇一一）は、三社祭の「棒折れ
事件」をめぐる祭同好会と奉賛会の動向を描き出すことによ
って、浅草を支えている価値観を明らかにすることを目的とし
た論文である。その中で佐々木真里は、「浅草の地域特性と
密接に関わっている」（二二五）ものとして祭同好会を取り上
げて、祭同好会にとっての三社祭りの理想的な姿である「美
しい祭り」について記述した。

四点目として、神輿会が有する表現文化や言語芸術の一端
を示した研究が挙げられる。八木橋伸浩（二〇一五）の目的
は、天祖神社の祭礼を通してそこに見られる人間模様を観察
することである。そこでは、神輿同好会が有する言語芸術が
豊富に紹介されているほか、絆纏を通して会の力量や規模を

他の同好会に向けて誇示する、といった表現文化を有してい
ることを記述している。上記の四点の研究における知見は、
ひとつの祭礼における神輿会の姿を明らかにする視点におい
ては必ずしも重要であるとはいえない情報だろう。しかし神
輿会の姿を包括的に描き出すことを試みる上では、重要な研
究蓄積のひとつだといえる。

五点目として、神輿会が参加していく複数の祭礼という視
点を用いたことによって、神輿会を介して都市祭礼同士が影
響を与え合っていく様を描き出した研究が挙げられる。早い
段階で神輿会に注目した北村敏（一九八九）の研究目的は、
神社祭祀と祭礼の今日的諸相をみていくことで、都市におけ
る祭りの隆盛の精神的側面について検討することである。目
的こそ都市祭礼を中心に置いたものではあるが、調布市の神
輿愛好会が自身と直接関係の無い三社祭においてどのような
役割を担っているかを記載するなど、神輿愛好会を中心的な
対象とした記述も見受けられる。また中里亮平（二〇〇九）
は、祭ブームとは何か、祭ブームは祭礼にどのような影響を
与えたのかを考察することを目的としたものである。その中
で中里亮平は、三社祭などを頂点とする祭礼のヒエラルキー
からすれば周辺部に位置するくらやみ祭に、三社の担ぎ屋が
訪れたことで担ぎ屋との接触が生まれたこと、そして担ぎ屋
集団にくらやみ祭の担い手が参加し、他地域で神輿を担いで

いく体験を通して、神輿の担ぎ方や格好、総社連合が創立さ
れるなどの変化が起こっていったこと、そして最終的には、
総社連合がより周辺部に位置する西多摩地域の祭礼に参加し、
影響を与えていくという様子を記述している。この点からの
研究は、複数の祭礼における神輿会の姿に言及しており、特
に興味深いものであるといえる。

これらの研究は、中心的な研究対象とされてこなかった神
輿会の包括的な姿の一端を明らかにしたものとして、極めて
価値のある研究である。しかしこれらの観点をより深く明ら
かにしていくことを考えると、神輿会という地域や祭礼にと
らわれず、必ずしも長い歴史を持つわけではない小集団を中
心的な課題として扱うための分析視角が必ずしも十分である
とはいえないことが指摘できるだろう。神輿会を主要な研究
対象とするためには、これまで「民俗」とされてきたものの
枠組みを越えうる分析視角を用いる必要がある。

(三) 本論文の視点

筆者は神輿会の包括的な姿を記述していくために、フォー
クロア研究におけるフォークグループ (folk group) に関
する研究を分析視角として用いる。

フォーククロア研究においては、何らかの共通の因子を持つ
た集団が重要な研究対象のひとつとされてきた。あらゆる小

集団の伝統をフォーククロア研究の対象として取り入れること
を推進したのが、アラン・ダンデスである。ダンデス（一九
九四）はフォーク (folk) を、「どのような人々の集団であ
れ、一つの共通の因子を分かち持っている人たち」（三三三）
として定義し、こういった集団が有する口頭での表現や、物
質文化、信仰、音楽、身体表現などをフォーククロアであると
した（同書三四～三五）。

近年の研究においては、このようなフォーククロアの定義に
含まれている「共通の因子」として、「興味関心」という因
子も挙げられるようになっていく。二〇一〇年代に入ってか
ら出版されたフォーククロア研究に関する書籍では、「共有さ
れた興味や技術 (shared interests and skills) にもとづく
小集団」(Sims and Stephens 2011: 38)、「興味関心に基
いた (interest-based)」(McNeill 2013: 4) 集団が、フォー
クロア研究の対象となりうることが明示されている。神輿会
もまた、興味関心や技術に基づいたフォークグループのひとつ
といえるだろう。

それでは、このように神輿会をフォークグループの視角か
ら分析することによって、どのような有用性がもたらされる
のだろうか。筆者はこのことには二点の有用性があると考え
ている。

一点目は、フォーククロア研究という分野において、長く小

集団を研究してきたことに関する知見が活用できるという部分である。Sims and Stephens (2011) によると、フォークグループに関する研究は、内側からも外側からもある集団がひとつの集団として認識されている理由を、成員たちによって非公式に共有されているジョークやストーリー、ゲーム、伝統、信念や習慣といったもの(フォークロア)を研究することによって明らかにしようとしてきた。これらのフォークロアは「集団のアイデンティティ (identity of group)」を創造し、それを強固なものにすることに、そしてそれを外部に向けて表現することを可能にしているという。そして、フォークロアによって創造される集団のアイデンティティがあるがゆえに、成員自身や外部の人間は、ある集団がひとつの集団として存在しているように認識する(三〇〇-三二二)。

このような集団が有するフォークロアに注目し、集団のアイデンティティを明らかにするという視点を用いることによって、ひとつの祭礼以外における神輿会を研究対象とすることができる。そして、神輿会が共有するフォークロアを研究することによって、神輿会のアイデンティティを理解することができる。そのような神輿会のアイデンティティの理解に基づき、複数の祭礼に参加しており、多くの祭礼に影響を与えている神輿会の姿を記述していくことによって、これまでの研究では必ずしも明確に示すことができなかった都市祭礼の

変化の側面を明らかにしていくことができると考える。

二点目は、フォークロア研究が創造性に注目する視点を持っている部分である。内田忠賢(一九九九)は、日本における都市民俗学の展開を「都市文化の中でも前近代的な要素、変わりにくい部分を見いだす作業であった」(三五)と振り返った上で、現代的なバリエーションに注目し、生活文化の新しい側面を見ていく必要があることを論じている(同書三六-四〇)。筆者は内田忠賢が指摘しているように、神輿会の有する表現文化の現代的なバリエーションに注目していくことが、都市祭礼の変化を論じる上で重要であると考えている。フォークロア研究は、研究対象とされるフォークロアを、「芸術性、創造性、もしくは表現の側面を持つている」(Sims and Stephens 2011: 7)「または「人びとによって、生きられ、経験され、生み出され、共有されるもの (Ibid: 31)」だとしている。フォークロア研究が人びとによる創造性という側面を重要視していることは、「生きた・生きられる」(lived/living)や、「ヴァナキュラー」(vernacular)という概念がフォークロア研究において重要視されていることからも分かることである。

筆者は集団の創造性を重要視するフォークロア研究の視点を都市祭礼に持ち込むことによって、神輿会を動的なものとして捉え、神輿会の成員が祭礼を生きられたものにしてよう

する取り組みを記録することができると考える。これにより、それぞれの会が「江戸の伝統的な祭礼」をどのように受け入れた上で、生きられた祭礼を創造しているのか、そしてそれがどのような相互行為の中で生み出されてきたのか、というように注目することができるだろう。また、それぞれの祭礼において神社や氏子組織といった権威ある存在によって定められた規定がある中で、それを受け入れ、時にはそれに逆らいながら、会のアイデンティティを表現していくといった、神輿会の生きられた実践に注目することも可能になるだろう。

三 神輿会研究の重要性と定義

(一) 神輿会研究の重要性

第二章では、これまでの研究において、包括的な神輿会の姿に対する研究が必ずしも豊富であるとはいえないことを指摘した。それでは、フォークグループに関する研究を分析視角として神輿会の有するフォークロアを明らかにしていくことによって、都市祭礼研究に対してどのような貢献をすることが可能なのだろうか。筆者は実際に、神輿会への参与観察や聞き取り調査を行う中で、包括的な神輿会の姿を研究することは、都市祭礼の三種類の変化を明らかにすることにつながるかと考える。

一つ目が、神輿会が成立した一九五〇・六〇年代から、会の結成がブームとなり徐々に浸透していく七〇年代にかけて、祭礼に影響を与えたことによる変化である。例えば松平誠(一九九三)が指摘したとおり、今日江戸前の「伝統」として担ぎ手に自明視されている江戸前担ぎが、神輿会という一年に複数回神輿を担ぐことができる立場の人びとによって誕生し、洗練されてきた可能性があることにも言及できるだろう。それと同様に、鳶職を真似たといわれている袴纏に股引、腹掛というような服装の誕生と、草創期の神輿会が有していた価値観との関係、そして神輿担ぎへの女性の参加についても論じることができると思われる。

二つ目が、神輿会が祭礼において定着を見せたことによる、祭礼の現代的な変化である。秋野淳一(二〇一五)が、町会公認の神輿同好会が「外に出る時は神輿同好会、中では町会の青年部」(三七)として機能していることを指摘したとおり、今日における一部の青年部は、自身が住む地域の祭礼では神輿をほとんど担がず、仕切り絆纏を着て祭礼を取り仕切る。そして自身の祭礼で担ぐことができない代わりに他の地域の祭礼に参加し、祭礼で出会う神輿会と関係を構築しながら神輿を担いでいる。このように、複数の神輿会同士が協力することにより、地域を越えた祭礼の維持システムが発明されている可能性があることなどについて言及することが可能

であろう。

三つ目が、神輿会を介して、祭礼と別の祭礼及びイベントがお互いに影響を与え合うようになったことによる祭礼の変化である。中里亮平(二〇一三)は東日本大震災を受けて祭礼の開催を自粛する動きが東京圏に広がったことを指摘した上で、「祭礼の現代的状況において、祭礼が孤立した存在でない」(四〇)と述べているが、神輿会という多くの祭礼で共通した担い手に注目しても、今日の祭礼は孤立した存在とはいえない。北村敏(一九八九)や中里亮平(二〇〇九)が指摘した、東京圏の祭礼同士による影響の与え合いを、神輿会に注目して記録していく必要がある。また、東北・北陸地方、そして海外でも成立している江戸前の神輿会や、それらの会の東京圏の祭礼への参加、東京圏の神輿会が他地域の祭礼・イベントに参加することを通して、江戸前担ぎという手法が全国、あるいは世界中の祭礼・イベントで用いられていることにしても研究していく必要がある。

都市祭礼に関する先行研究は、都市祭礼の変化に関してすでに多くの蓄積を残してきた¹³⁾。しかし、神輿会研究によって明らかにすることが可能なこれらの都市祭礼の三種類の変化は、これまでの都市祭礼研究においては、必ずしも豊富に取り上げられてきたとはいえない神輿会によって祭礼が生きられたことによる複数の祭礼を巻き込んだ変化であり、包括的

好家による集団」と定義したい。

この定義の特徴は以下の二点である。第一に、神輿会の成員は複数の祭礼やイベントに参加して神輿を担ぐ機会を持っており、それを続けているということである。これは、年に一回自身が住む地域の祭礼において神輿を担ぐという旧来の地域の担い手の姿を越え、複数の祭礼に参加し、祭礼に影響を与えていく集団として神輿会を描くためである。第二に、神輿会は「神輿担ぎ」という興味関心や技術を共有した神輿愛好家による集団だということである。この部分は、興味関心という共通の因子を持った集団として神輿会を捉えることで、フォークロア研究との接続をはかるためのものである。

神輿会に対してのこれまでの研究は、神輿会が都市祭礼における新しい形式の担い手であることを強調するために、地縁や職場関係などにとらわれない集団として定義してきた¹⁴⁾。しかし筆者の定義は地縁や職場関係などの日常的な関係性が稀薄な集団であるという部分に拘っていない。この理由は以下の二点である。一点目は、「神輿同好会」を名乗っているものの中にも、地縁や職場関係による縁に依拠しているものが存在するからである。二点目は、「複数の祭礼に影響を与え合う存在」から都市祭礼を見るという視点を強調するためである。それゆえ、町会や青壮年部の一部であったとしても、これらの特徴に該当するものは、本論文のいう神輿会に含ま

な神輿会の姿についてフォークロア研究を分析視角とする視点に独自のものだといえるだろう。

(二) 神輿会の定義をめぐる議論

図2は以上で述べてきた、包括的な神輿会の姿を中心的な研究対象とし、会が参加する複数の祭礼の変化を論じる」という本論文の視点を図示したものである。筆者は本論文の視点の重要性を最大限に活用する形で、神輿会を「年に複数回、祭礼やイベントにおいて神輿を担ぐことを続けている神輿愛

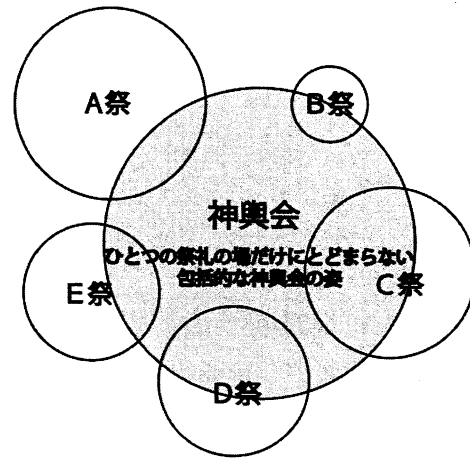


図2 本研究の研究視点
灰色部分が研究対象を指す
筆者作成

れるものとする。

四 日本神輿協会アカデミー編(二〇一〇) から見る神輿会の成立と展開

本章は、これまで述べてきた視点を活用して包括的な神輿会を主要な研究対象としていく上で、基礎的なデータとなる「神輿会というシステムは、いつ・どこで・なぜ成立したか」、そして「どのように神輿会は広がりをもってきたか」というふたつの問いに対して、数量的データから一定の傾向を示すことを目的とする。

表1は、「神輿会がいつ・どこで・なぜ成立したか」や、「神輿会をめぐる当時の環境」について言及しているものをまとめたものである。多くの先行研究において、一九七〇年代には各地で神輿会の成立が相次いでいく傾向があることが示されている。しかし、草創期の神輿会はいつ・どこで成立してくるのか、そして各地の神輿会はなぜその時期・その場所において成立するのか、ということに関しては、神輿会に対する量的調査が不足していたこともあり、必ずしも明確に示されてきたとはいえない。

表1 神輿会の成立に関する記述

肩書	文獻名	時期	神輿会をめぐる当時の環境	成立場所	成立理由
研究者	北村敏 (1989)	昭和40年代 (言及なし)	続々と誕生 初めて成立した	大田区 深川*1	浅草・神田・深川での神輿チームの影響 (言及なし)
	松平誠 (1993)	1970年代 1970-80年代	参加が目立つようになった 70年代・27、80年代・24成立	(言及なし)	居住者の空洞化 (pp.57)
神輿会 成員	清水純 (2010)	1975年頃	我が物顔で町会神輿を担ぐ	千代田区鎌倉町	地域外から来る神輿同好会との軋轢 (言及なし)
	佐々木真里 (2011)	昭和40年代	神輿同好会が増加	(言及なし)	(言及なし)
写真家	秋野淳一編 (2014)	1974年頃	同好会チーム	各地	(言及なし)
	斎藤力ほか編 (2001)	昭和40年代前半 昭和40年代後半	当時としては珍しい おちこちで成立	東銀座	(言及なし)
	小澤宏之 (1984)	昭和40年代	爆発的神輿かつぎチーム	(言及なし)	(言及なし)

*1 松平は、神輿会のルーツが深川にあることを示唆しているが「実際のところは分からない」とも述べている。それぞれの文獻に基づき筆者作成

(一) 依拠する資料の特徴と問題

本章では、管見の限りではこれまでの研究において引用されてこなかった日本神輿協会アカデミー編(二〇一〇)を分析することでこれらの問いに対して一定の回答を示したい。日本神輿協会アカデミー編(二〇一〇)には日本神輿協会の

傘下にある二〇二の神輿会のデータが掲載されている。神輿会に対しての量的調査が行われていない現状において本書は、成立年と本拠地が掲載されている神輿会が一九七あること、データ収集の範囲が明確である部分において貴重なデータであるといえる。

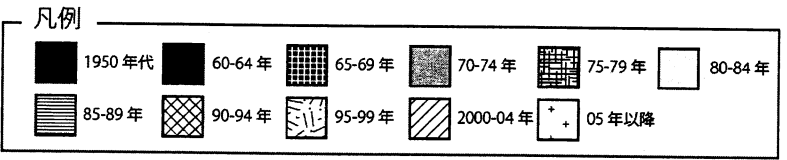
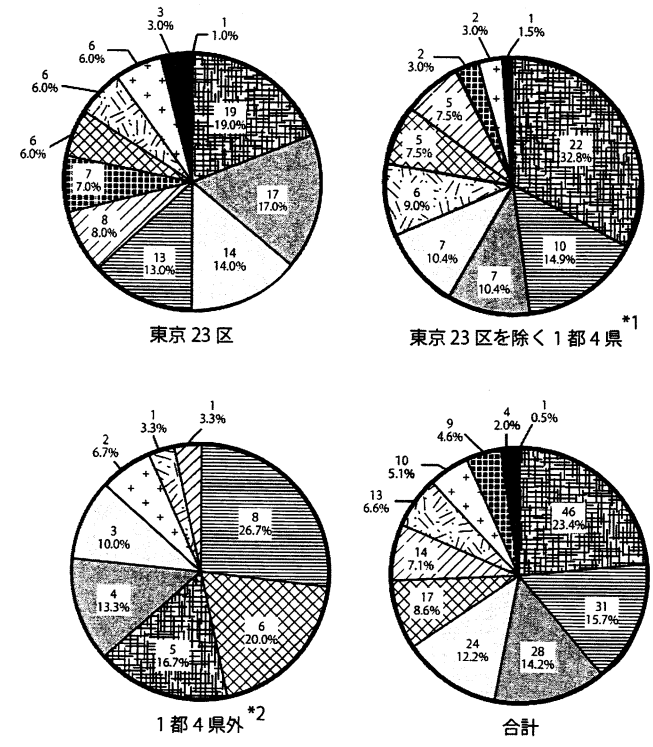
その一方で、いくつかの限界があることも否めない。最大の問題は、本書の調査が神輿会を無作為に抽出して行われたものではない点であろう。このことによる偏りが現れている可能性がある部分として、区を単位とした連合会が日本神輿協会に登録しているため、区内の神輿会の日本神輿協会への登録率が高い可能性がある区(台東区・墨田区・板橋区)があることが挙げられる。二点目は、本書が二〇一〇年に発行されており、二〇一〇年に存在していなかった神輿会のデータを記載できていない点である。つまり、二〇一〇年までに解散した会やそれ以後に作られた会の傾向を示すことができていない。

以上の二点の問題点を踏まえると、このデータによって示される神輿会の成立年代と地域的な分布は、日本神輿協会に文章執筆当時所属していた神輿会の傾向を示したものであり、現在の神輿会の全体的な傾向を示しているとはいえない。しかし、神輿会の成立と祭礼の変化とを結びつけ、その関係性を論じるためには、神輿会の成立に関する基礎的なデータを整備することが不可欠であろう。そういった意味から以下では、日本神輿協会アカデミー(二〇一〇)に掲載された神輿会のうち、一九七の神輿会の成立年度と本拠地について分析し、得られた知見を記載する¹⁶⁾。

(二) 神輿会の広がり

図3は、東京二三区(標本数：一〇〇)、二三区周辺の一都四県(六七)、一都四県外(三〇)の三地域に、合計(一九七)を加えた四つの項目において、いつ成立した神輿会が多いかを円グラフで表したものである。図3からは東京二三区で一九五〇・六〇年代に成立し、七〇年代に流行を見せた神輿会が、どのように広がっていき、今日においても成立が見られる程に定着を見せているかについて一定の知見を得ることができる。

本データからいえることは以下の四点である。一点目は、松平誠(一九九三)のアンケート調査と同じく、草創期の神輿会は東京都区部において五〇年代から六〇年代にかけて成立してきたという点である。二点目は、先行研究の多くが指摘するとおり、七〇年代に全体の三九・一%の神輿会が成立しており、他の年代と比較して多い傾向が見られるという点である。三点目は、二三区周辺の一都四県においては七〇年代後半に入ってから八〇年代にかけて流行を迎える傾向が見られる点である。この時期には、それぞれの祭礼を研究した中里亮平(二〇〇九)や清水純(二〇一〇)が指摘したように、地域外から来た神輿会に影響を受けて、その地域での神輿会が成立することが相次いでいた可能性が考えられる。四点目は、八〇年代後半から一都四県外においても江戸



*1 23区周辺の1都4県を指す(茨城県/神奈川県/埼玉県/千葉県/東京都[ただし23区を除く])
 *2 前述の1都4県に含まれない地域を指す

図3 地域・成立年代ごとの神輿会成立数
 日本神輿協会アカデミー編(2010)に基づき筆者作成

前神輿を担ぐことを目的とした神輿会の成立が活発になってきた点である。一都四県の外に存在する神輿会は、東京に神輿を担ぐために訪れ神輿場で江戸前担ぎを学ぶ。そして、それを各地域に持ち帰り、地域で江戸前担ぎを取り入れながら神輿を担ぐことを行っている。東京圏外においても、神輿会は江戸前担ぎを地域に持ち込むことによって、その土地独自の担ぎ方などに影響を与えているといえるだろう。

(三) 二三区内での成立時期と場所

図3では、草創期の神輿会が多いことや、神輿会の集積が見られることから、神輿会が東京二三区で中心的に発展してきた可能性があることを示した。そこで次は、東京二三区だけに注目して神輿会が年代ごとどこで成立するのかについて見ていきたい。図4-1・4-2は、東京二三区においていつ・どこで神輿会が発生したか、図5は二〇一〇年の時点でどこに日本神輿協会に所属する神輿会が多く存在しているかについて、地図の濃淡を用いて表したものである。ここから読み取れる知見は以下の二点である。

一点目は、神輿会の成立が爆発的なブームになる七〇年代以前に成立した神輿会は、台東区、墨田区などで発達してきていることである。日本神輿協会アカデミー(二〇一〇)に記載されている中で最も古い神輿会である「浅公 笹川陸」は、

墨田区において五八年に成立しており、代表者である笹川英男氏は五四年から四年間、五代目新門辰五郎のもとで見習いをしたという(一一)。こういった語りは、神輿会と台東区や墨田区といった地域とのつながりを感じさせるものである。松平誠(一九九三)も指摘している通り、六四年の東京オリピック以後、二三区の中でも目立った人口減少を見せる台東区や墨田区などの二三区東部において草創期の神輿会が成立してきたことから、人口の減少などが神輿会の成立に影響を与えている可能性があることを指摘できるだろう。

二点目は、七〇年以降の神輿会設立ブーム期においては、広域部において神輿会が成立してくるということである。多くの神輿会の成立が集中している七〇年代においては、二三区中一六区で神輿会が成立している。また、草創期には成立が見られない二三区北部においても、七〇年代以降から成立が目立ち、結果的には先行する東部と同様に神輿会が集中する一地域となっている可能性がある。七〇年代以降は人口が必ずしも減少していない地域や時代でも神輿会の成立が相次ぐことから、神輿会成立の経緯や理由は「人口の減少」だけではなく、多様であることが指摘できる。このように神輿会の成立年代と成立場所とを分析してみると、神輿会の機能や目的、そして関係する人びとの性質が七〇年代前半を境として変化している可能性があることも仮説のひとつとして提示

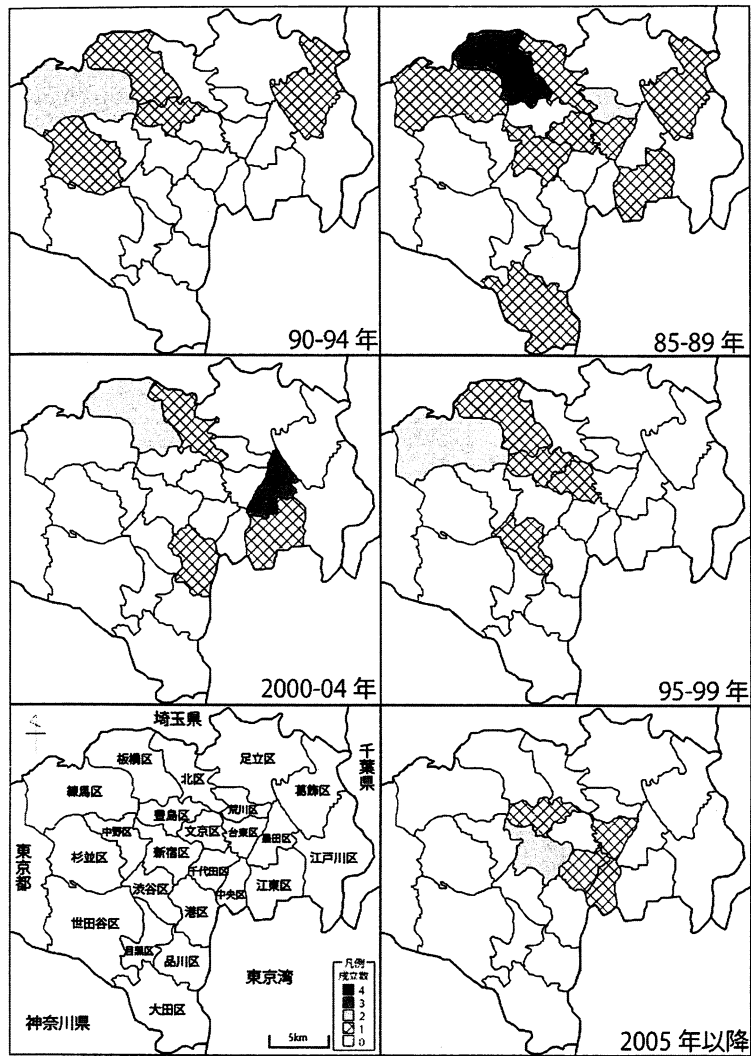


図4-2 各年代の23区における神興会の成立数
 数値は日本神興協会アカデミー編(2010)に基づく
 地図は地理院地図1945-50年空中写真に基づき筆者作成

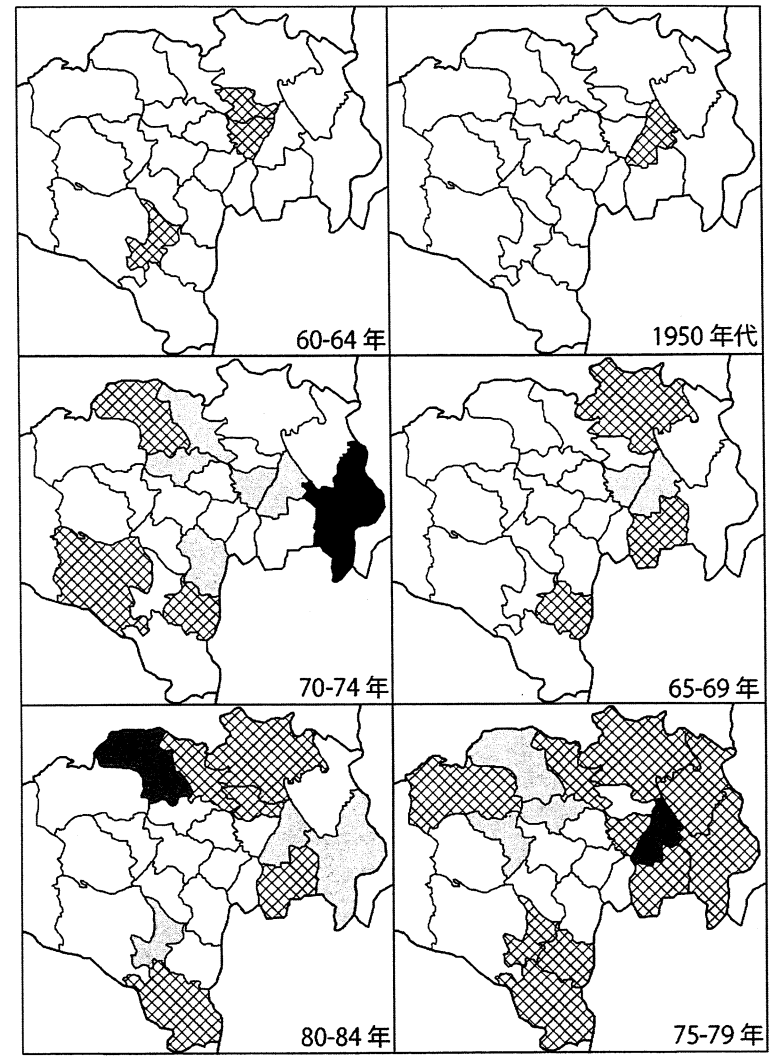


図4-1 各年代の23区における神興会の成立数
 数値は日本神興協会アカデミー編(2010)に基づく
 地図は地理院地図1945-50年空中写真に基づき筆者作成
 凡例は図4-2に記載

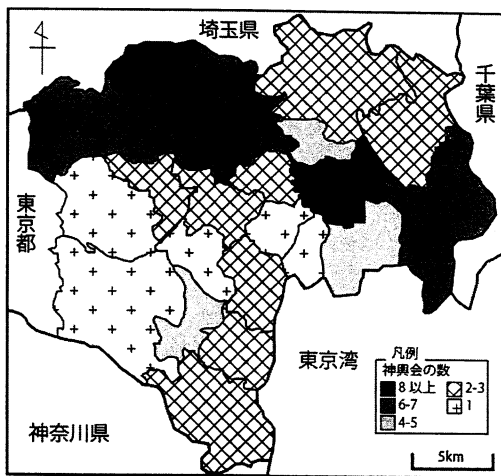


図5 23区における神輿会の分布
 数値は日本神輿協会アカデミー編(2010)に基づく
 地図は地理院地図1945-50年空中写真に基づき筆者作成

することができると考える。

五 神輿会研究の課題

本論文はこれまで、祭礼以外における神輿会の姿に関する研究が必ずしも積極的に行なわれてきていたとはいえないことと、しかし神輿会の包括的な姿を研究することは、都市祭礼の変化を論じる上で重要であることを指摘してきた。

を理解するためには欠かすことができない。また、都市祭礼研究の観点からこれまでに触れられてきた、「地域と神輿会との関係」というテーマについても、神輿会に注目するという別の視点からの知見を提示する必要がある。

そして、祭礼以外での場における神輿会のフォークロアも明らかにしていく必要がある。一つ目がインターネット上における神輿会の姿である。多くの神輿会や会の会員は内田忠賢(二〇一五)が指摘する通り、SNSや会の公式サイトにおいて関係の構築を行っている。フォークロア研究は、インターネット上におけるフォークグループに対する研究蓄積を持つ¹⁸⁾。これらの知見を用いて、インターネット上での神輿会の関係性やアイデンティティの表出について研究していくことも課題の一つである。二つ目が、神輿会の会員が積極的に関わってきた市民祭りなどのイベントにおける神輿会の姿である。神輿会は積極的に地域イベントの賑やかに協力しているほか、神輿会自体が神輿を担ぐイベントを企画・運営しているケースも少なくない。神輿会を研究対象とすることが、祭礼だけでなくイベントをも研究対象に入れうることを活用していく必要があるだろう。

そのほかにも、非東京圏に存在する神輿会に注目する研究も課題として挙げられる。東北圏では二〇〇〇年以降にも神輿会の成立が相次いでおり、会員による江戸前担ぎの理想化

その上で前章では、神輿会の会員が執筆した資料を利用することで、「神輿会というシステムは、いつ・どこで・なぜ成立したか」、そして「どのように神輿会は広がりをもてきたか」という問いに対して、一定の傾向を示すことを試みた。しかしこれらの成果は、神輿会の包括的な姿を明らかにするという目的に対して実には瑣末なものでしかないといえるだろう。筆者は実際に神輿会に対する参与観察・聞き取り調査を進めている最中であるが、調査を進めていく中で、以下で述べるように、都市祭礼の変化を鮮明に論じるために理解していかなくてはならない神輿会研究の課題であると考えている。

まず、これまでの神輿会研究によって一端が明らかにされてきた、祭礼における神輿会のフォークロアを更に明らかにしていく必要があるだろう。これまでの神輿会研究によって提示されてきた、「神輿会の歴史的展開」「会の中における人間関係、会員の特徴」「会員の有する価値観」「神輿会の表現文化や言語芸術」「参加する祭礼によって異なるふるまい」といった観点にこれからも取り組んでいく必要がある。また、これまでは必ずしも注目されてきたとはいえないが、会員が有しているマテリアルロアにも注目する必要がある。会員は半纏以外にも、木札や手ぬぐいといった小物によって会のアイデンティティを表現しており、集団のアイデンティティ

が進行している。こういったことが現地の祭礼にどのような影響を与えているのかに注目していくことも重要であろう。今後はこういった課題に取り組んでいく必要がある。

付記

本研究は、二〇一五年度関西学院大学先端社会研究所サーチコンペから助成を受けたものです。

註

- (1) 本論文ではこれまで研究者の間で、「神輿同好会」(松平一九九三、清水二〇一一、八木橋二〇一五など)、「神輿愛好会」(北村一九八九)、「祭同好会」(中里二〇〇八、佐々木二〇一一)、「担ぎ屋」(中里二〇〇九、八木橋二〇一五)などと呼ばれてきたものを含むより大きな集団を「神輿会」と表現している。その定義については第三章で論じるが、「年に複数回、祭礼やイベントにおいて神輿を担ぐことを続けている神輿愛好家による集団」である。なお、本論文に頻出する「神輿」、そして「半纏」という単語に関しては直接引用を除き、主要な研究資料である日本神輿協会アカデミー編(二〇一〇)と、大江戸睦監修(二〇〇六)の表現に倣い「神輿」、「半纏」の表現に統一する。ただし、「半纏合わせ」という一単語として用いられる際

には、高橋平徳（二〇〇七）、清水純（二〇一〇、二〇一
二）に倣い「半纏」の表現を用いる。

- (2) 二〇〇〇年以降の研究だけに限定しても、元三島神社例大祭を取り上げた高橋平徳（二〇〇七）や、天祖神社例祭を事例として取り上げた八木橋伸浩（二〇一五）などが、祭礼における神輿会の参加を指摘している。

- (3) 中里亮平（二〇一〇）が指摘するとおり、「祭礼の変化」を社会環境の変化に流されるものとして捉えることは、地域の人びとや神輿会の主体性を見落とす結果につながるだろう。筆者は本論文において「祭礼の変化」という表現を多用するが、当事者による主体的な変更や、後述する「祭礼が人びとによって生きられたことによる変化」を含む言葉として利用する。

- (4) 朝日新聞二〇〇七年七月十三日朝刊より。

- (5) 佐々木真里（二〇一一）は、神輿会と暴力団の関係について、「（祭同好会が裏社会に関係する組織であると認識されている理由は*筆者加筆）喧嘩祭りである三社祭で、万一ケンカなどに巻き込まれるようなことがあったなら、そのときに守ってもらえる『看板』が必要であるからだ。大元の看板のもとに、名前の異なる同好会が所属し、連合体をつくっているというイメージを持ってもらうのが、一番近い」（二一九）と述べている。

- (6) 例えば中里亮平は、東日本大震災を受けて「神輿渡御が行えなかった都内の担ぎ屋・暴力団が次に神輿を担ぐ機会としてくらやみ祭りに目をつけ侵入してくることを警戒」（中里 二〇一三）（三七）する神職の語りを紹介している。

- (7) 本論文におけるフォークロア研究とは、北米における民俗学と、それを踏まえて世界各地で展開されているフォークロアをめぐる研究の総体を指す。日本におけるフォークロア研究に関しては、島村恭則（二〇一四）を参照のこと。

- (8) こういった興味関心や技術に基づいたフォークグループに関する研究で実際に研究対象とされている集団として、キルト作りサークル (quilting circle) (例えば Gainor 2011 など) や、アメリカのTVアニメである、'My Little Pony: Friendship is magic' (邦題: マイリトルポニー・トモダチは魔法) の熱狂的ファン (brony) (Ellis 2015) などが挙げられる。

- (9) ここでいう「生きられた・生きられる」「ヴァナキュラー」とは島村恭則（二〇一四）によると、「あるコンテクストの中で、個人によって実践・運用される」（五）ことを指す。

- (10) 松平誠（一九九三）は江戸前担ぎの誕生に関して、「浅草に始まったといわれるソリヤ・ソリヤの掛け声や、腰をいれず、爪先立ちで調子をとる担ぎ方、見せ場で御輿を自由

- に操って見せる集団的動作などは、多くは御輿同好会の発展のなかで生まれたものと見られる」（六一）と言及している。このことに関する根拠は必ずしも明確に示されていないが、神輿会を研究することの重要性を早くから指摘していた一文といえるだろう。

- (11) 例えば、小澤宏之（一九八四）などがこのことについて指摘している。同時に小澤宏之は、六四年の東京オリンピック終了後の祭ブームの時期から、服装が派手になっていったことも指摘している（七八〜七九）。後述するとおり、この時期に多数成立する神輿会との関係は、研究するに値するテーマといえるだろう。

- (12) 日本神輿協会アカデミー編（二〇一〇）には、「女性だけの神輿会」が掲載されている。このような女性の神輿会がどのように成立・定着してきたかを研究することで、東京圏の祭礼において女性が担ぎ手として認められていく姿を描き出すような研究も重要だといえるだろう。

- (13) 都市祭礼の変化についての先行研究は中里亮平（二〇一〇）が詳細な検討を行っている。それによると、先行研究として柳川啓一の「近代化・社会変動」による祭礼の変化、和崎春日の「観光化」による祭礼の変化、谷部真吾や中野紀和、そして中里亮平自身の「関係者達の相互行為」による祭礼の変化などが挙げられる。包括的な神輿会に注目する

ことで得られる知見は、関係者達の相互行為によって祭礼が生きられることによる祭礼の変化といえる。

- (14) 例えば、北村敏（一九八九）は神輿会を「地域性が稀薄な祭礼集団」（二〇二）と定義しており、松平誠（一九九三）は「地域の組織とは無関係に御輿担ぎの愛好者が集まってつくった同好会組織」（五七）と、清水純（二〇一一）は「神輿の愛好者たちによる自由参加型のボランティア・アソシエーション」（一）と定義している。

- (15) 睦会でもあり神輿同好会でもある会については、秋野淳一（二〇一五）や中里亮平（二〇一〇）が言及している。また、神輿会のメンバーが日常的に職業上のつながりを持っている場合も珍しくないことについては、秋野淳一編（二〇一四）が述べているほか、同じく大江戸睦監修（二〇〇六）には、日本橋のホテル従業員が集まって結成し、今もほとんどがホテルマンで構成されている神輿会の紹介が掲載されている（六二〜六三）。日本神輿協会アカデミー（二〇一〇）や、「やんちゃ美学」、大江戸睦監修（二〇〇六）などを見る限りでは、完全に地縁や結社の縁と関係しながらも、「神輿同好会」と称している会が珍しいとはいえない。

- (16) 二〇二二の神輿会の中で、除外した五つの神輿会は以下のとおりである。① 粋睦（除外理由：本拠地が明確でない）、

- ②にいがた 常磐會(本拠地が明確でない)、③百舌番組 神輿會(成立年が不明)、④神輿渡御 越後 信濃會(本拠地が明確でない)、⑤よの神龍會(本拠地が明確でない)。またひとつの神輿會が、本拠地についてふたつの地域を併記していた。これについては最初に挙げられている地域を本拠地とした(浅草橋 晃龍會)。他に、三つの神輿會が本拠地について自治体レベルよりも細かい記載を行っているため、自治体レベルへの統一を行った。変換を行ったのは、①「築地」を東京都中央区に(大江戸愛好会馬場睦會)、②「川崎市古市場」を川崎市幸区に(藤睦會)、③「湯島」を東京都文京区に(湯島 錦引睦會)である。
- (17) 実際に、愛媛県松山市に存在する神輿會「愛媛江戸神輿連合 弁天睦會」は、「江戸前の神輿をこゝ松山で『粹』に担ごう」という目的をもって発足したものであり、「本来、松山の祭りは、神輿の鉢合わせをする『けんか神輿』の地域であり、発足当時は異端児的な扱いを受けてきたのは事実です(いずれも日本神輿協会アカデミー二〇一〇二八)」と述べている。
- (18) 代表的なものとして Blank, Trevor ed. (2009, 2012) などが挙げられる。

参考文献

- 秋野淳一編(二〇二四)「祭りと共に渋谷中央街を生きる」『都市民俗研究』(二九) 一二六〜一五三
- (二〇一五)「都市祭りの経年的変化——戦後の地域社会の変容と神田祭五〇年の盛衰」『國學院雑誌』一一六(一一) 三〇〜五四
- 内田忠賢(一九九九)「都市の新しい祭り」と民俗学—高知「よきこい祭り」を手掛かりに—『日本民俗学』(二二〇) 三三〜四一
- (二〇一五)「都市の熱気—市川秀之・中野紀和・篠原 徹・常光徹・福田アジオ編著『はじめて学ぶ民俗学』(ミネルヴァ書房) 七八〜八五
- 大江戸睦監修(二〇〇六)『祥纏ものがたり』(優しい食卓)
- 小澤宏之(一九八四)『江戸神輿』(講談社)
- 北村 敏(一九八九)「東京近郊の神社と祭り—調布市を事例として—」岩本通弥ほか編著『都市民俗学へのいざない—混沌と生成』(雄山閣) 一七五〜二〇四
- 斎藤力ほか編(二〇〇一)『神輿図鑑』(アクロス)
- 佐々木真里(二〇一一)「観光地・浅草の『三社の絵』—浅草における地域維持の仕組み—」早稲田大学大学院人間科学研究科 人間科学専攻 地域・地球環境科学研究領域

二〇二一年度修士論文

- 島村恭則(二〇二四)「フォークロア研究とは何か」『日本民俗学』(二七八) 一〜三四
- 清水 純(二〇二〇)「神田祭—大都市の祭礼における現代的変容」日本大学経済学部中国・アジア研究センター Working Paper Series No.24
- (二〇二二)「神田祭—担ぎ手の動員をめぐる町会と神輿同好会の関係—」『日本民俗学』(二七一) 一〜三一
- 高橋平徳(二〇〇七)「祭りの担い手に関する一考察—東京都台東区根岸二丁目と愛媛県西条市大谷の事例より」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』一四(二) 一五三〜一六四
- ダンデス、アラン(一九九四)「フォークロアとは何か」荒木博之編訳『フォークロアの理論—歴史地理的方法を越えて』(法政大学出版局)
- 中里亮平(二〇〇八)「祭礼と『顔が良く』人々—東京都府中市大國魂神社くらやみ祭りの事例から」『民俗学論叢』(三三) 五一〜六四
- (二〇〇九)「祭ブームと祭礼の影響関係—東京都府中市大國魂神社くらやみ祭の事例から」『民俗学論叢』(三四) 四七〜六〇
- (二〇一〇)「変更からみる祭礼の現代的状況—東京

都府中市大國魂神社くらやみ祭の事例から」『日本民俗学』(二六一) 一一〇〜一五三

——(二〇一三)「祭礼の自粛・中止に関する研究—被災地以外の地域からみた東日本大震災」『民俗学論叢』(二一八) 三三〜四五

日本神輿協会アカデミー編(二〇一〇)『日本神輿同好会名鑑—日本神輿協会創立三〇周年記念』(日本神輿協会アカデミー)

松平 誠(一九九三)「都市祝祭伝統の持続と変容—神田祭による試論」『応用社会学研究』(三五) 四九〜八八

八木橋伸浩(二〇〇八)「共同幻想の喪失と『個』への対応」『日本民俗学』(二五三) 六五〜七四

——(二〇一五)「マチのつきあい」市川秀之・中野紀和・篠原徹・常光徹・福田アジオ編著『はじめて学ぶ民俗学』(ミネルヴァ書房) 一九八〜二〇七

Blank, Trevor ed., 2009, *Folklore and the Internet: Vernacular Expression in a Digital World*. Logan: Utah State University Press.

—— ed., 2013, *Folk Culture in the Digital Age: The Emergent Dynamics of Human Interaction*. Logan: Utah State University Press.

Ellis, Bill, 2011, *What Promises See When They Broke: Queeri-*

ng Animation on the Dark and Evil Internet”, The Journal of American Folklore, (128) :pp.298-314.

Gainor, Rhiannon, 2011, “*Hobby Quilting Websites and Voluntary Provision of Information*”, New Directions in Folklore, (9) :pp.41-67

<https://scholarworks.iu.edu/journals/index.php/ndif/article/view/1113>

McNeill, Lynne S, 2013, *Folklore Rules: A Fun, Quick, and Useful Introduction to the Field of Academic Folklore Studies*. Colorado: Utah State University Press.

Sims, Martha C. and Martine Stephens, 2011, *Living Folklore, Second Edition: An Introduction to the Study of People and Their Traditions*. Logan: Utah State University Press.